

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Syntactic Functions of Japanese Particle Zo as used in the 16th Century

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1992-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安達, 隆一, Adachi, Ryuichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2126

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



係助詞『ゾ』の構文史

—近代日本語構文の成立に関連して—

安達隆一

はじめに

筆者は、《係り結び》構文の消長が近代日本語構文の成立に深く関与するという観点に立って、係助詞《コソ》つまり《コソー已然形》構文の史的展開について略述を試みた。《コソー已然形》構文の衰退は、喚体的統合関係に基づく構文法の衰退であり、近代日本語構文の成立は、原理的には、それに交替する述体的統合関係の確立によることを指摘した⁽¹⁾。それに引き続いて本稿では、《係り結び》構文の一類としての係助詞《ゾ》をとりあげ、《ゾー連体形》構文の、近代日本語構文の成立に果たす役割について概略を試みるものである。

一般的に、《係り結び》構文にあって《ゾー連体形》構文の消長現象は、《コソー已然形》構文に比較して、考察の対象にはなっていない⁽²⁾。旧来《コソー已然形》構文の考察は、係助詞と呼応関係にある述語の形態的異同の記述から表現機能の限定に至るという方法を志向してきた。しかし《ゾー連体形》構文は、現象としては《結びの乱れ》をともなうことなく消滅する。《ゾー連体形》構文の衰退は、連体形終止法の一般化の現象に関連づけて説くことに終始せざるをえないというのが現状であろう。

(1) 拙稿 係助詞『コソ』の構文史 (1991) (神戸外大論叢42・2)

—近代日本語構文の成立に関連して—
国語構文史の一側面 (和泉書院)

—主格標示構文から主格無標示構文へ— (1992)

(2) 係り結び《ゾー連体形》の史的展開について大野晋の考察をあげることができる。それとも古代語を対象とする記述的研究が中心である。

《係り結び》構文について史的現象として見るならば、《コソー已然形》構文に比較して、《ゾー連体形》構文の衰退ははるかに早い。例えば、『天草版平家物語』（1593）には和歌・原拠本の直接の引用を除くと、次の5例を数えるにすぎない。⁽³⁾

- (1) よも失ひ奉るまでのことはござるまじい：いかさまにも奥の方へぞ下しまいらせられうずるかと申さるれば、（360-18）
- (2) 大臣殿なのめならずいとほしいことにさせられて、西海の旅の空までもつひに片時も離れさせられぬ心に軍敗けてのち、四十日あまりになるけふぞはじめてごらうぜられた。（357-22）
- (3) 空の鳴り、地の動くたびにはただ今ぞ死ぬると言うて、（367-15）
- (4) おのれはるるか！ 人はいつくへぞと問はれたにぞせめてのことであった。（393-12）
- (5) たれぞ見知った者どもでこそあるらうとおほしめされたれば：いとど足早に通らせられたが、（317-3）

『天草版平家物語』に散見する5例は、対応関係にあると目される原拠本『百二十句本』（斯道文庫本）の本文においても、そのまま《ゾー連体形》の呼応関係になっている。『百二十句本』には《ゾー連体形》構文が多用されており、《コソー已然形》構文に比して、著しい衰退現象を呈しているとは判断されない。したがって『天草版平家物語』における急激な減少は、《ゾー連体形》構文の史的変遷の有り様をいかほどか反映するものと言ってよいであろう。

本稿は、『天草版平家物語』の本文と『百二十句本』の本文との比較を通して、《ゾー連体形》構文の衰退の諸相を概略したうえで、その構文史的役割についての筋道を仮説的に述べてみようとするものである。具体的には、次のような考察段階を経る。

(3) 『天草版平家物語』のテキストには、亀井高孝・阪田雪子翻字（吉川弘文館1966）を使用する。『百二十句本』のテキストには、（汲古書院1970）を使用する。

- (1) 『百二十句本』に認められる≪ゾー連体形≫構文の諸相
- (2) 主格成分に関わる用法の構文的特徴
- (3) ≪ゾー連体形≫構文の消長と近代日本語構文成立への関与性

1. 『百二十句本』に認められる≪ゾー連体形≫構文の諸相

『百二十句本』に認められる≪ゾー連体形≫構文について、①係助詞≪ゾ≫の承接成分、②≪結び≫としての述語層の二点から、その特徴を述べることにする。

① 係助詞≪ゾ≫の承接成分

I 格成分に関わる用法

① NP + φ + ゾ

(6) 平家ノ人々ハ是ニ付テモ最消入ル心地ゾセラレケル。(巻第10・629-9)

② NP + P + ゾ (P → ヲ・ニ・ニテ・ヘ・ト)

(7) 様カエタル由ヲ聞ケレハ飯テ瀧口入道ニ一首ノ歌ヲソ送りケル。(巻第10・597-2)

(8) 南無ト唱ル声トモニ海ニソ沈玉ヒケル。(巻第9・557-4)

(9) 馬ニハ人人ニハ馬落重テ指シモ深キ谷一ツ平家ノ勢七万余騎ニテソ埋上ケル。(巻第7・431-4)

(10) 都合其勢十万余騎寿永二年四月十七日ノ午ノ剋ニ都ヲ立テ北国ヘソ趣ケル。(巻第7・422-4)

(11) 東ハ生田森ヲ大手ノ城戸口ト定メ西ハ一谷ヲ城廓トソ構ヘケル。(巻第9・504-5)

③ VP (連体形) + φ + ゾ

(12) 往生院トハ聞タレトモ定カナル処ヲ知サリケレハ此ニ徘徊ニ彼ニ徘徊ミ尋カヌルソ無慙ナル。(巻第10・595-10)

④ VP (連体形) + P + ゾ (P → ニ)

(13) 我身コソ有ラメ人ノ為ニハイカトテ泣々月日ヲ送り玉フニソ
責テノ志ノ深キ程モ顕レケル。(巻第10・569-8)

係助詞《ゾ》は格成分に広く承接する。個々の具体的な比較は本稿では省略に付すが、この傾向は《コソ一已然形》構文の承接仕方とさして異なるところはない。ただし、《コソ一已然形》の承接において見られる

(14) 女院冷泉大納言七条修理大夫此人トモ内方ヨリコソ時々間ヒ候
へ。(巻第12・766-10)

という《ヨリ・カラ・マデ》に承接する用法は見当らないという相違がある。それを考慮したうえでなお、《ゾ一連体形》構文は、やや用法は狭くなるものの、《コソ一已然形》構文とともに勢力を保っているとみなすことができ(4)る。

格成分に関わるなかでは、主格成分(例1・12)に承接するものにかぎり格無標示形式の構文になることが注目される。主格を除く格成分はそれぞれ格助詞を顕在化させる構文である。この構文的特徴に触れて大野晋(1960)は、

文末の連体形終止との呼応関係は単なる形式的なものになっており、やがて「ゾ……連体形」という係結それ自身の意味が見失われるに至る寸前の姿を呈している。

と述べている。確かに対格《ヲ》・与格《ニ》に格助詞が介入して格標示形式の構文が主流を占めるとすれば、構文史的に言って《係り結び》による統合関係の衰退を指摘してよいであろう。

II 連用修飾成分に関わる用法

① Adv+ゾ

(4) ただし複合形式の《～ヨリシテゾ一連体形》という用法は認められる。また接続助詞《～バ》に承接する構文は存しない。

(15) 人ノ上ナラハイカ計カ知盛モドカシウ候ヒナント雨々トゾ泣レケル。(巻第9・547-10)

Ⅲ 述語内成分に関わる用法

㉑ VP (連用形) + ϕ + ゾ

(16) 池大納言頼盛ハ……鳥羽ノ北ノ門ヨリ都へ引ソ返サレケル。(巻第7・462-11)

(17) 各後ヲ顧テ都ノ方ハ霞メル宵ノ心地メ煙ノミ心細クソ立上ル。(巻第7・469-2)

㉒ VP (連用形) + ゾ

(18) 熊谷是ハ平家ノ公達ニテソ御座スラン。(巻第9・548-8)

Ⅳ 引用成分に関わる用法

㉑ S + ト・トテ + ゾ

(19) 不思議ニテ平家ノ世ニモ立直ラハ六代ニタヘト申スヘシトソ宣ケル。(巻第10・608-5)

(20) 何レモ人ノ上ナラストテソ泣レケル。(巻第10・567-6)

Ⅴ 並立成分に関わる用法

㉑ VP (連用形) + テ + ゾ

(21) 怪ムヘキ景モナクシテ皆馬ヨリ下リ深く畏テソ通シケル。(巻第10・609-11)

格成分以外の成分に承接する用法は上記のごとくである。

大野晋(1960)が指摘するように、Ⅳ引用成分に関わる用法が多くなる。このことは係助詞《ナム》の衰退に係助詞《ゾ》が関わることを示唆する。また《係助詞》と《結びの述語》との距離をスコープと称すると、総じて係助詞《ゾ》のスコープが短いことを指摘しておく必要がある。⁽⁵⁾

㉒ 《結び》としての述語層

(5) スコープという述語は使用していないが、ほぼおなじ観点からの考察に、小田勝(1989)がある。

係助詞《ゾ》の構文は、基本的には連体形との呼応関係を崩さぬ構文である。その意味では結びの已然形が異同を示しつつ展開する係助詞《コソ》とは趣を異にする。つまり《ゾー連体形》構文は、衰退期から衰退までの期間が比較的短いことを伺わせる。承接成分の固定化は、一方では呼応関係にある述語層の固定化と相即的である。ここでは結びとなる述語層の特徴を概観しておこう。

結論からいうと、結びの述語層は、いわゆるテンス・アスペクトに関わる《キ・ケリ・タリ》に固定化する。そしてそれは確言のモードとも言うべき表現性を有する。そのかぎりにおいて、《ケリ》のもつ主観性に関わる表現機能は消滅するとしなければならない。⁽⁶⁾ちなみに対応関係にある《天草版平家物語》の本文は、《キ・ケリ・タリ》のいずれもおおむね《タ》となっている。このことは《ゾー連体形》の衰退に《キ・ケリ・タリ》の衰退が関与することを想像させる。

そのなかでも特徴的なのは、Ⅳ引用成分に関わる用法である。引用成分に関わる基本的な構文は、《ートゾー—Vケル》という構文である。それに混じって

(22) 此等ヲ宥ラレハ虎ヲ養ニ似リト御沙汰アツテ終ニキラレケルト
ソ聞ヘシ。(巻第9・504-1)

(23) 内侍所ノ御事能ク申サセ玉ヘトソ書レタル。(巻第10・574-2)

(24) 大方人ノ仕態トハ覚ヘス。只鬼神ノ所為トソミヘタリケル。
(巻第9・537-1)

(25) 其ノ移香ハ石山ノ聖教ニ留テ今ニ有トソ承ル。(巻第10・501-4)

のような《キ・タリ・タリケリ・ル形》の構文が散見する。ただし、Ⅳ引用成分に関わる用法では《ートゾー—Vケル》形式に固定化されると言ってよい。

推量の述語層と呼応する例は多くはない。

(6) 《ケリ》については、鈴木 泰 (1992) に詳しい。係助詞《ゾ》と助動詞《ケリ》の変遷との間には、相互の交渉があると考えている。いずれ稿を改めて述べたい。

(26) 御邊ハ平家方ニテハ定テ名アル人ニテソヲワスラン。(巻第9・539-11)

(27) 此度ソ世ハ終ント申ケレハ(巻第8・490-2)

(28) 後陣ノ者共ハ定テ明日ノ合戦ニテソ有ン……トテ(巻第9・515-11)

など《ム・ラン》数例を数えるのみである。この関係は中古語における概言のムードといわれる推量の助動詞との呼応のあり方とまったく異なる。⁽⁷⁾《確言のムード》形式として《キ・ケリ・タリ》が《タ》に統一されると相即的に、《概言のムード》形式としての推量系助動詞が《ウ・ヨウ》に統一される。それとともに《ゾー連体形》が形式化すると考えられる。連体形終止法の一般化が影響するのは上述のような経過を基盤にしてのことにほかならない。

2. 主格成分に関わる用法の構文的特徴

主格成分に関わる係助詞《ゾ》は、格無標示形式の構文であった。まずこの構文にあっては、次のような構文的特徴を指摘することから始めたい。

(29) 軍トイヘハ札ヨキ鎧キテ大太刀ニ強弓モチ一方ノ大将ニ指向ラレケルニ度々ノ高名肩ヲ双ル人ソナキ。(巻第8・493-10)

(30) 新中納言知盛船ノ艫ニ立テ軍ハ今日ソ限ナル。各々少モ退心アルヘカラス。(巻第11・658-7)

いずれも《NP+NP+VP》という文型つまり《一ハーガ》構文といわれる構文の原型である。このうち(29)は、《NP ϕ +NPゾ+VP(連体形)》、(30)は《NPハ+NPゾ+VP(連体形)》という構造になる。

この構造に言及した考察には、佐治圭三(1974)・大野晋(1960)がある。佐治圭三はこの構文形式について、「最狭義の係り結びは叙述の内部で働く

(7) 中古語における推量との構文的関係については、高山善行(1988)に詳しい。中古語に比べて、はるかに用法が狭い。

ものである」こと、「最狭義の係助詞は主題を提示しない」ことを明らかにしている。また大野晋は、「……ハ……ゾ……連体形」の文型がその類型をも含めて、中古語における係助詞《ゾ》の基本的構文であることを明らかにしている。

この類型には、次のような構文をあげることができる。

(31) 文学召出サレ年八十ニ余テ 隠岐国ヘソ流サレケル。(巻第12・778-4)

(32) 件ノ女房ノ棲居玉フ処ハ東山ノ麓祇園ノ邊ニテソアリケル。
(巻第6・397-8)

(33) 左右ノ手ト覚シキヲサシ上タルカ片手ニハ槌ノヤウナル物ヲ持
チ片手ニハ光ル物ヲソ持タリケル。(巻第6・398-3)

佐治圭三の言う「最狭義の係り結びが叙述の内部で働く」こと、「最狭義の係助詞は主題を提示しない」ことは、統語論的に言い換えれば、一つには係助詞《ゾ》と係助詞《ハ》のスコープの違いとして、一つには《ゾー連体形》の統合関係が格助詞になる統合関係よりも優先する関係として理解される。

《ゾー連体形》に基づく《係り結び》構文は、統合関係の緊密さつまりスコープの狭さゆえに、その関わる成分の異同を超えて、《NP+VP (連体形)》の形態的呼応を維持する。したがって係助詞《ハ》は、《題目》《対比》のいずれにしろ《NP+VP (連体形)》の呼応関係を崩すには至らない。したがって、係助詞《ハ》が《題目》となる構文は、すべて《NP+NPゾ+VP (連体形)》の構造であり、その逆の構造はありえない。

(34) 冷泉大納言隆房卿七条修理大夫信隆卿ノ北方ソ最後及モ御訪ハ
申レケルト承ル(巻第12・770-10)

(35) 夫ヨリメソ鎌倉源二位殿トハ申ケル。(巻第11・675-8)

(34)(35)のように逆構造は、なんらかの《対比》の意味が加わるのである。

この類型的な構文にあって、(29)(30)は係助詞《ゾ》が格助詞《ガ》に代わることによって、主格標示形式の構文になるものであり、(31)(32)(33)

は《ゾー連体形》の衰退にともなって係助詞《ゾ》が脱落するものである。

『天草版平家物語』の残存例(1)~(5)にこの種の構文は見当たらない。このことからすると、この構文現象は《ゾー連体形》の崩壊と、格助詞による統合関係の確立の過程を予測させるものといえる。

近代日本語構文が成立するためには、係助詞《ハ》が《ゾー連体形》の一体性を超えて述語層との呼応関係を確立しなければならない。係助詞《ゾ》が統語論的機能を失いつつ一方では次元の異なる統合原理が働かねばならない。係助詞《ゾ》から格助詞《ガ》への展開は、それほど単純な過程ではない。

《係り結び》構文としての《ゾー連体形》の衰退は、呼応関係の崩れに先立って係助詞《ゾ》の統語論的機能の形式化をもたらす。《係り機能》から《取り立て機能》への転換である。

(36) 平山ハ早ヤ物具メ…中略…今度ノ軍ニ人ハ知ラス季重ニ於テハ一足モ引マシ物ヲトソ独言ヲソシケル。(巻第9・522-8)

(37) 是ソ今日ノ大將軍ノ駿トハ見ヘタリケル。(巻第8・491-1)

係助詞《ゾ》が文中係りから文末係りへと移行する、いわゆる終助詞化することは、日本語史上周知の事実である。

(38) 是歳カ周王赦カ元年ソ。(史記抄3・54-ウ)

(39) 義経怒らせられて鎌倉を出て西国へ向はうずるともがらは義経が命をそむくまじい儀ぞ：(天草平家336-9)

(38)(39)の終助詞《ゾ》は判断文の述語層をなすことにおいて

(40) これこそそよと言ひもあへず、手に持ったものを投げ捨てて、すなごの上に倒れ伏された。(天草平家86-14)

(40)の《ソヨ》と同類である。⁽⁸⁾これは文中における係助詞としての統語論的機能の喪失である。係助詞《ゾ》は《取り立て》機能へと構文的には交退する。

(8) 《コレコソヨ》の構文史的展開については、拙稿(1991)において詳説した。

(36)(37)は『百二十句本』に見るかぎり例は少ない。(36)は《NP(平山)ハ—VP(シケル)》という対応の内部に多項述語を重層的に含む。文中において取り立てられる成分《人ハ》《季重ニ於テハ》《一足モ》とあたかも対応するごとく、係助詞《ゾ》が連続する。《—トゾ—独言ヲゾ》の連続において、先行の係助詞《ゾ》の統語論的機能は停止せざるをえない。《係り》機能の《取り立て》機能化である。それは同時に《ゾ—連体形》という統合関係の形式化をも意味する。

(37)は《NP(是)ゾ—VP(見ヘタリケル)》の間に、《取り立て》成分が介在する構文である。係助詞《ゾ》は係助詞《コソ》に置き換えることも可能である。

(41) 是ソ今日ノ大將軍ノ駿トハ見ヘタリケル。

是コソ今日ノ大將軍ノ駿トハ見ヘタリケル。

《NP(是)ゾ》は、まず《NP(大將ノ駿)》との間に意味的統合関係を形成する。それと同時に文末述語《見ヘタリケル》と形態的統合関係を結ぶ。この二重構造において、係助詞《ゾ》は、承接成分の統合よりもむしろ分離へと機能することになる。これもまた係助詞《ゾ》の取り立て助詞化の方向を示唆する。ただし、係助詞《ゾ》は文末取り立てへと向い、係助詞《コソ》は文中取り立てへと向う。その方向性において、係助詞《ゾ》と《コソ》は異なることになるのである。

係助詞《ゾ》は係り結び《ゾ—連体形》の呼応関係を保つことにおいて、統語論的には喚体的統合原理に基づく統語法である。したがって、係り結び《ゾ—連体形》の衰退は、とりもなおさず喚体的統合関係の衰退を意味する。(38)(39)の判断文は喚体的統合関係に基づく係助詞《ゾ》の構文的達成である。

喚体的統合関係の衰退は、それに代わるものとしての述体的統合関係に基づく統語法の確立を促す。具体的には、格助詞による格標示構文形式の確立であり、題目提示を機能とする助詞《ハ》による構文形式の確立である。

『百二十句本』にみる係り結び≪ゾー連体形≫構文は、呼応において形式的に連体形を保持する。このことは、述体的統合関係による統語法に向う趨勢にあって、喚体的統合関係がその力を遺存させていることを示す。それと相即的な関係において、係助詞≪ハ≫が述体的統合関係を担うものとして完成していないことを意味する。

3. ≪ゾー連体形≫構文の消長と

近代日本語構文成立への関与性

『百二十句本』に多く存在する≪ゾー連体形≫構文は、『天草本』では一変して少数になる。それはまさに古態的遺存の状況にある。『百二十句本』とても、≪係り結び≫構文の完成期たる平安時代の状況とは比べるべくもなく、衰退の末期的状況にあると考えられる。≪ゾー連体形≫構文の衰退が形式的な助詞の交替ではありえないことは、前節において述べたところである。本節では、≪ゾー連体形≫構文の消長の経過を概略的にたどることを通して、それが近代日本語構文の成立にいかなる関与性をもつかということについて述べてみたい。

係助詞≪ゾ≫の関わる成分が主格成分以外の構文では、≪ーハガ≫構文とその類型的な構文を除けば、係助詞≪ゾ≫の削除はきわめて容易なことである。連体形終止法の確立とあいまって、係助詞≪ゾ≫が喚体的統合関係への関与性を失えば、必然的に係助詞≪ゾ≫は文中係りの機能を喪失する。したがってここでは、主格相当の構文について、その交替の諸相を考察することにする。

④ ≪NP + φ + ゾ≫ → ≪NP + ガ≫

- (42) 九郎義経ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ紫裳濃ノ鍔キテ金作ノ太刀ヲ帯キ切符ノ矢負ヒ塗籠藤ノ弓ノ鳥打ヲ紙ノ広サ一寸計ニ切テ左リ巻ニソ巻タリケル。是ゾ今日ノ大將軍ノ駿トハ見ヘタリケル。(巻第8・491-1)

義経は赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧をき、塗籠藤の弓の鳥打を紙の広さ一寸ばかりに切って、左巻きにまかれた。これが今日の大將軍の印と見えた。(天草平家240-1)

- (43) 七騎カ内ニ巴ト云女武者ソ有ケル。其比齡二十二三也。(巻第8・493-8)

七騎のうちに巴といふ女武者があったが、そのころ齡は二十二三で、(243-5)

(42)はいわゆる総記といわれる構文である。統語論的な構造については既に触れたところである。この構文にあっては、係助詞《ゾ》と格助詞《ガ》とは、必ずしも等価的とは思えないところがある。二重構造にあった《是ゾ》の呼応関係が格助詞《ガ》にあっては解消しているといわねばならない。『天草平家』が係助詞《ゾ》を格助詞《ガ》に代替するとともに、取り立て機能をもつ《ハ》を削除していることも注意しておいてよい。

(43)は存在文である。一般的に言って、現象描写文はほぼ格助詞《ガ》が有形化する。後文の題目成分において、係助詞《ハ》の介入によって《NP φ》から《NP ハ》の構文になることも指摘しておきたい。

⑥ 《NP + φ + ゾ》→《NP + ハ》

- (44) 是ヲ聞キ彼ヲ聞ニ付ケテモ心ヲ迷シ魂ヲ消スヨリ外ノ事ソナキ。(巻第10・623-9)

これを聞き、かれを聞くにつけても、心をまどはし、魂を消すよりほかのことはなかった。(324-7)

- (45) 三東ノ王子ヲ始メ藤白ノ王子以下王子々々ヲ伏拝ミ坂ヲ上リテ和歌吹上玉津嶋ヲ顧ミ又早晚參ルヘシトモ覺ネハ心ニ涙ソスミケル。(巻第10・608-10)

高野をたち、粉河の観音に参らせられ、一夜通夜あって、そこを出らせらるるにもいつ帰らうとも覚えねば、心に涙はすすんだ。

(316-20)

係助詞《ゾ》が衰退して《ゾ》の承接成分に他の助詞が介入するには、それ相応の内的心然性がなければならぬ。係助詞《ハ》が取り立て（卓立）機能を本来的にもつとすれば、結果として《題目》《対比》の違いに掃着しようとも、本来的な機能に結び付く共通性に基づいてはじめて係助詞《ゾ》に対応できることになる。否定文は係助詞《ハ》の本来的機能に関わる文である。その意味で(44)には《ゾ→ハ》の交替が可能な統語論的必然性があることになる。

『天草平家』をみるかぎりでは、(44)(45)は現代語の用法と同じである。しかし(44)(45)も、少なくとも《ゾー連体形》のもつ喚体的統合性に由来する情意性を反映することを根底に置く。(45)に《ハ》が該当するのもその意図の具体化である。つまり係助詞《ハ》の統語論的機能にもある種の制約が認められるということである。それは次のような対応関係にも現れる。

(46) 来シ方行末思ヒツツケテイカナル宿業ヤラント悲玉ヘトモ甲斐
ソナキ。(巻第10・585-6)

こし方ゆく末を思ひつづけて何たる宿業かと悲しまれたれども、
甲斐もなかった(300-4)

《～ドモー甲斐ソナキ》という文は、すべて《～ドモー甲斐モナカッタ》という構文になる。これは

$$\sim\text{ドモ} \left\{ \begin{array}{l} \text{甲斐ガ} \\ \text{甲斐ハ} \\ \text{甲斐モ} \end{array} \right\} \text{ナカッタ}$$

とすることが可能である。口訳者の言語使用意識を考慮に入れる必要があるものの、《ゾ→モ》の対応関係が成り立つ統語論的必然性があると言わねばならないであろう。

© 《VP + φ + ゾ》→《NP + ハ》・《NP + φ》

古代日本語構文から近代日本語構文に至るなかで、連体句の体言的用法の衰退をあげることができる。

(47) 往生院トハ聞タレトモ定カナル処ヲ知サリケレハ此ニ徘徊ミ彼ニ徘徊ミ尋カヌルソ無慚ナル。(巻第10・595-10)

往生院とは聞いたれども、さだかに所を知らなれば、ここにたたずみ、かしこにたたずみ、たづねかねたことはまことに無慚なことぢゃ。(300-4)

(48) 維盛カ身ハ雪山ニ鳴ラン鳥ノヤウニ今日ヨ明日ヨト物ヲ思フ事ヨトテ涙ニ咽給フソ慈シキ。(巻第10・602-8)

三位の中將は雪山に鳴く鳥のやうに、けふよ明日よものを思ふことよとあって、涙にむせばるる体まことにいとほしいことぢゃ。

(312-3)

一般的に言うと、『天草平家』に認められる連体句の体言的用法は、多くは判断文の題目成分となる用法である。裸形の連体句はまず体言を修飾する連体修飾句になる。連体形終止が一般化するのに応じて、連体形と終止形の機能分化が生じる。連体形の体言的機能の喪失である。格関係による統語法つまり述体的統合関係が一般化するには、連体形の機能の変化が先行する必要があった。

(47)(48)について言えば、裸形の連体句にそれぞれ体言が加わり、それに<<題目>>機能をもつ係助詞<<ハ>>が介在する。ただし助詞無標示形式と助詞標示形式とは共存関係にあり、係助詞<<ハ>>が定着しているわけではない。また<<ゾー連体形>>のもつ情意的含意は(47)(48)ともに副詞<<マコトニ>>によって表現される。喚体的統合関係は、ここのような経過において、述体的統合関係に統語論の原理の座を譲るのである。

係り結び<<ゾー連体形>>は、主格成分にあって格助詞<<ガ>>・係助詞<<ハ>>の顕在する述体的統合関係によってなる構文へと展開する。しかしそれは決して直線的な経過を経るわけではない。係助詞<<ゾ>>ひいては係り結び<<ゾー連体形>>の消長過程には、さらに係助詞<<コソ>>が関与する。

(49) 其中ニ新中納言能登殿ハカリソ好ハヲハセシ。大臣殿ノ父子モ

虜リヌ。(巻第11・654-9)

そのなかに新中納言、能登殿ばかりこそよりはござったれ：大臣殿の父子も生け捕りまらした。(340-6)

- (50) 是ぞまことの孫にてましましける。(覚一本・岩波古典大系)
これこそまことの孫なれとおほせられて、(天草本198-23)

格助詞<<ガ>>の制限用法として助詞<<バカリ>>との非共存をあげることができる。『天草平家』に見るかぎりでは、助詞<<バカリ>>は<<トバカリ>><<一デバカリ>>におおよそかぎられる。つまり(49)に関しては格助詞<<ガ>>の顕在する条件にはない。

係助詞<<コソ>>が構文史上衰退の傾向を顕在化しつつも喚体的統合関係をもって機能している状況からすれば、係助詞<<ゾ>>と係助詞<<コソ>>の交渉は、ある意味で当然のことと言わねばならない。

また、<<ゾー連体形>>が確言的なムードに制約されるという経過をたどることで、係助詞<<ゾ>>は係助詞<<コソ>>に交換される統語論的条件を得ることになる。

- (51) 後陣ノ者共ハ定テ明日ノ合戦ニテソ有ン。軍モネムタイハ大事ノ物ソ。(巻第9・515-11)

後陣の者どもはさだめて明日の合戦でこそあらうずれ、軍もねむたいは、大事のものぞ、(255-19)

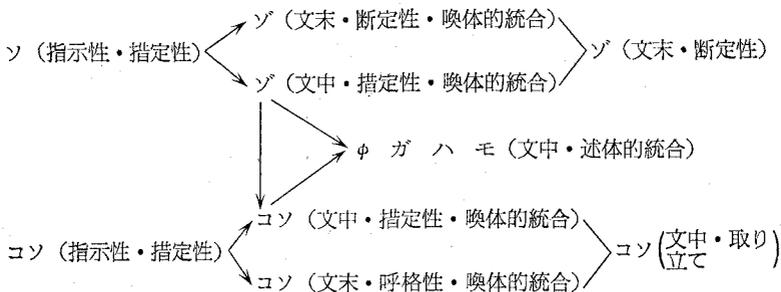
それと相即的に喚体的統合関係の到達にある終助詞<<ゾ>>は、疑問詞を含む疑問文の述語層<<断定+推量>>に対応する統語論的機能を獲得する。終助詞<<ゾ>>が喚体的統合関係の達成たるゆえんである。

- (52) 誰ナルラン見知タル者トモニコソト思召ケレハ足ハヤニソ通シケル。敵ニテハナカリケリ。(巻第10・609-4)

たれぞ見知った者どもでこそあるらうとおぼしめされたれば：いとど足早に通らせられたが、敵ではなうて、(317-3)

ま と め

係り結び《ゾー連体形》の衰退現象を、近代日本語構文の成立への関与性という観点から、統語論的にたどって、その大筋を略述してきた。係り結び《コソー已然形》の衰退現象とあわせて、次のように示すことができる。⁽⁹⁾



近代日本語構文の成立が格関係による統語法の確立にあるとすれば、それはまさに述体的統合関係による統語法の確立である。《係り結び》構文の衰退は、直接間接的に述体的統合関係の成立に関与する。《係り結び》構文の衰退によってはじめて、近代日本語構文は成立しえたと言ってもよいであろう。また『天草版平家物語』の世紀は、述体的構文機能と喚体的構文機能とが拮抗しつつも、述体的構文機能の優位性が顕在化する時代でもあった。近代日本語構文のまさに成立期にあると言ってよい。

引用文献

- 大野 晋 1960 「日本語の構文(二)～(五)係助詞の役割」(文学53-3・5・7・9)
 1990 日本語で一番大事なもの(中公文庫)
 佐治 圭三 1974 「係り結びの一側面—主語・叙述(部)に関連して—」(国語国文43-5)
 小田 勝 1989 「出現位置から見た係助詞「ぞ」」(国語学195)
 高山 善行 1988 「《係り結び》と《推量の助動詞》——中古語における、文表現と助動詞層との交渉——」(語文51)
 鈴木 泰 1992 古代日本語動詞のテンス・アスペクト(ひつじ書房)
 近藤 泰弘 1986 「〈結び〉の用言の構文的性格」(日本語学5-2)

(9) この系統図に関わる係助詞《コソ》についての考察は、拙稿(1991)において詳しく述べている。